

この国で「過ぎたるは猶及ばざるが如し」といえば、それはおおよそ「出る杭は打たれる」といつているようなものであると思う。

とにかく、今は独りになれる場所が欲しかった。なにかこう、精神的に大きなことではなくて、なんとなく誰にも気兼ねなくというか、気楽に作業をこなすのに集中する、スペースを探していた。

地面に照り返して屋内まで熱を放射する太陽とか、過剰な照明とか、そういうものからとかく退避したかった、そんな感じがする。

探していた、といつても、別にお出かけ先でちよつと座れるカフェを探してみたいなコトよりは、この辺は日常的に来るところなんだから、おおよその候補というか、めぼしはついている。それでもウインドウショッピングするみたいに観察しながらちよつどいいスポットを探すのには意外と時間がかかったりする。

案外こういう時に限って(?)、ペアとか団体が使つてたりして、結局二番目に考えていたところに落ち着いた。この時間は、というかあんまりこの辺を歩く用事というかそういうことがない人が多いだろうし、なかなか人通りの少ないスポットで、いつもそこちよつと奥のその机に荷物をひろげて作業するのはちよつとしたルーティンみたいなところはある。

と、いつものようにこの日はいかなかった。「特等席」

のところではないが、奥の端つこの席のところちよつと広げられた荷物と、机のうえに、すらりと足を組んだ肢体が背中を向けて座っていた。

とはいえ、なにかの作業をしているのか知らないが、別に何の支障もないので、ここを拠点してしまおうというところ、その背中はこちらに気付いた。

丁寧に筆で払ったような目じりをしていて、はつきりとこちらを捉えて吸い付けるような瞳が据わっていた。

正面から映すと妙に存在感を無くす整った鼻筋があった。

控えめだが幾分か水分をたえた口許が電気信号にあわせてこまやかに運動した。

若干だが口角をあげて、

「ごめんさい、ちよつと考えることをするのに、使わせてもらつていて、もしかしたら、少し歩き回ったり、急な動作をするかもしれないから、あまり気にしないでください。」

意味自体は分かるのだがいまいち要領をえない宣言を受けたものの、むしろその意図どおりというか、自分の机で作業はつつがなく進んでいた。

ただ、本当に宣言どおり、脚は一定のリズムでゆつたりと、ひざを丁寧に駆動させて、上半身は何かを考えてうなつているような恰好で、席の周りをぐるぐると動きまわつてはいた。

「やっぱり気になります?」

今、少し目が合ったような気がしたので……」

そう言われて、ふとしっかりと顔をあげてしまった。手元の作業はしながらやっていたから、別段、顔をあげていたわけではなく、たしかに、目のはしにこそ映ったかもしれないけど、目が合った気は、正直しなかった。しまった、と思った。

糸で引つ張られたみたいに、目線が、動かなく、なつた。

「ふふ、すみません、無理ですよ、いくら気にするなつて言つたつて、やっぱり周りで動き回られたら、気になりますよ、ね」

その澄んだような深いような瞳は、きれいに反射して私を映しこんでいるようにも、すべてを吸収して深く闇が佇んでいるようにも見えた。

私を見据えたまま、ゆつくりと近づいてくる。

ああ、最悪だ、これは一番最悪なパターンだ。

「もしかして、私たち、以前どこかで会つたこと、ありませんか?」

はじめから、私が相手を視認してしまつた時点でこの結果はもう避けられないことくらい、私は、何度も経験していたことではなかったのか?

私がどうやって遠ざけたつて、

私が避けて過ごしたつて、

「逃げるこゝなんてできないつて、いつになったらわかるのかなあ」

どうして私はいつも逃げられない?

あらゆる繋がりや、私は、私から、
本当は私の目の前に現れるはずなんてないのに、
「なのにどうして逃げたりなんかするのかな」

それでも、私の中には、きつときっかけがある。
私が甘いからとか、私が馬鹿だからとか、そういうこ
とじゃなくて、

「必要ないから？ それとも、有害だから？」

違う？ 私が向き合ってこなかったから？

私が逃げてきたのは、向き合うこと？

私が向き合ったところで、私とこの世界に何か悪いこ
とがあるとも思えないのに、

「でも結局無駄なんだよ？」

「どうしてそれを、受け入れようとしらない？」

私は一生そのままなのかもしれない。